

編集後記

交流協会本部事務所が入居しているビルは、若者の街、六本木にありますが、この街の環境が日々悪化しております。出勤時間帯の午前9時だというのに、夜通し遊んだと思しき男女達が路上で屯して奇声や嬌声をあげたり、千鳥足でふらついていたりと誠に見るに堪えない有様です。また歩道の汚れも酷く、交差点辺りは足の踏み場もないほどに食べ物や空き缶、ペットボトルなどが散乱し、情けないことに時には酔いつぶれて、そのゴミの山の中で寝込んでいる者さえいます。

「…最近の若い奴は…」と、四千年前のエジプトの絵文字にも同様の記述があるそうですので、これは、古今東西を問わず老人の屈折した若者への嫉妬の枕詞なのかも知れません。

今夏の暑くて長い夜、眠れない腹立たしさもあって、つい、この詞を呟いて、日本人の「公德心の恢復」について考えてみました。

日本人が初めて手にした書物は、記紀によると「論語」であったそうで、爾来、日本の教育は一貫して論語が基盤となり、他の書物に毒されていなかっただけに日本人は世界で一番由緒正しい儒生となって、卓越した倫理観と潔癖性を有するようになった。と、昔々漢文の先生から習いましたが、若干の疑問を抱きつつも当時は感動したものでした。

また、バチカンの記録には、日本へ派遣した宣教師から「任地は平和で親子兄弟相睦まじく、貧しくとも着ているものは清潔で、街の隅々までにも塵一つ落ちていない。これほど心豊かな人々に本当にキリスト教の布教が必要なのか？」との疑問が本山へ投げかけられたそうです。これなど、昔の日本の教育が、いかに素晴らしかったかを物語っています。

然るに、このような立派な御先祖様の末裔達が、今日、なんとという体たらくでしょうか。

諸々の原因が考えられますが、学齢期の倫理・道徳＝論語教育の欠如にあると考えます。

現在、義務教育では「古典に親しむため」の指導要領のもとに、漢文では杜甫、李白等の詩の二、三首だけで済ませており、論語が記載されている教科書は極希だそうです。

邦家史上屈指の儒者であり、偉大な教育者でもあった伊藤仁斎は、論語を宇宙第一の書と称え、特に「…朋有り遠方より来たる…」の開巻冒頭の短文は、論語の全篇が凝縮されている所謂「小論語」であり、最も重要で別格のものであると力説しています。

「公德心の恢復」の第一には、漢文の授業時間を増やし、これまでの漢詩の他に、この論語の開巻冒頭を全学童に教えるべきだと思います。第二には、台湾では学童の修学旅行は、台南の孔子廟への参廟が一般的だそうです。我が国にも旧幕藩からの孔子廟が各地にありますので、遠足の際に訪れさせれば、より効果的です。第三には、私も猛省しておりますが、どんなに面倒でも家庭内での教育を疎かにしないことが肝要です。

孔子生誕 2563 年、美しく思いやりに満ちた世の中になることを願って止みません。

(経理部長 松浦 和雄)